

東日本大震災の政府追悼式典に係る挨拶の英譯を平成二十四年（二〇一二年）より擔當せり。被災地代表の挨拶のあまりの悲しさに英譯は胸痛めながらの作業とあひなり、特に初年度は翻譯者も含め作業に携はる者全員が、涙なくして作業するを得ざりき。

津波の映像みるたびに、神は何故日本人にかくのごとき試練を與へ給ふかと考へさせられき。曾て、ユダヤ教のラビ、ホロコーストにつき、信徒より、何ゆゑに神はユダヤ人を見捨て給ひしか、と問はれて、言葉に窮したりとの逸話あり。

かの大災害よりはや三年、はた、いまだ三年といふべきか。日本國民の受止め方千差萬別。復興しつつある地域と、逆に全く進まぬ場所との差、一段と大きくなりぬとの報道、今年は多く見られたり。この大震災には國際社會より届きたる人道支援、前代未聞と知られけるも、災害の規模それほど甚大なるの證左なり。

震災の後、物資受け取りに整列したる被災者の姿、世界中のメディアにより稱賛せられたり。日本人として誇らしき思ひあれども、福島放射線による汚染物質受け入れの場所少なき實態に衝撃を受く。福島發の電力にて生活成り立つ關東は、何故受け入るるを拒むか。何と利己的なるか、悲憤に耐へず、とはかくのごときを言ふらん。

本年の追悼式典の伊吹衆議院議長挨拶に大いに共感するあり。曰く、日本人の祖先は、人間には制御不能の自然に對する畏敬と感謝を籠むる、謙虚さ持ち合はせけり。科學技術の發展により、暮らし豊かになりて人間の自然支配可能なりとの「驕り」生じ、その後の核兵器による悲劇生まれ、福島原發事故に繋がれり。湯水のごとく電力使ひ、物質的に快適なる生活當然の如く享受し來るは、我々全員の責任なるに、その全てを福島被災地に負はせし事心痛む。今なほ、故郷に戻る能はざる福島被災者たちに對し、月並みのお見舞ひ言ふに憚りありと。續けて、伊吹議長、電力は無盡藏に使ふを得との前提に立つライフスタイルを、自分たち一人ひとりが見直し、反省し、日本人として言行一致の姿勢にて省エネルギーと省電力の暮らしに舵を切る必要あり、自身國會議員として將來の脱原發を見据ゑ進む信念これありと締めくくりき。吾もその通りに思ふなり。

日本は地震國なれば、いつ大地震、おほなみ大津波の襲ふか知れず、明日、明後日やも知れぬ。よりに東日本大震災の記憶をして風化せしむるなく、常に被災地に思ひを致しつつ生き行く事大切なりと覺ゆ。

